

# 秦觀 「淮海集」

↳ 漢文の論理構造を  
理解する↳



## 本日の目標①

● 筆者（秦観）の  
主張を正確に  
捉えましょう。

臣聞、「草食之獸、不疾易藪。水生之虫、不疾易水。行小變而不失其大常也。」

知此者可以用兵矣。何則、夫兵之法、有所謂常。有所謂變。什則困之、伍則攻之、不敵則逃之、兵之所謂常也。以寡覆衆、兵之所謂變也。」

古之善用兵者、雖能以寡覆衆、而什困伍攻之道未嘗忽焉。所謂行小變而不失其大常也。」

〜段落〜

フモ

ヲ

ル

ハ

ノ

行 小変而不失其

ニ

一

レ

ニ

大常也。

一

筆者の

〜四段落〜

主張

所謂 行 小変 而

フモ

ヲ

ニ

一

不失其大常也。

ル

ハ

ノ

ヲ

レ

一

1 筆者の主張を本文中から抜き出しましょう。

行小変而不失

其大常也。

=

「小変（小さな変更）」を行っても、「大常（根本的な在り方）」を失うわけではないのである。

## 本日の目標②

自分の意図を相手に正しく伝えるには、論理構造や「伝え方」の技法が重要であることを学びましょう。

2 主張を支える説明の方法を学びましょう。

① 具体例

事実に基づき、あるいは現実の物事に即して示される例。

② 対比

相互の違いを明らかにするために二つ（以上）の物を比べること。

③ 同義反復

重要な内容を表現を変えて繰り返すこと。

一 臣聞ク「草食之獸」ハ

不疾易藪。水生

之虫、不疾易水。

行フモ小變ヲ而不失其ハ

大常也。」

対比

一

一

ニ



二  
知<sup>ル</sup>此<sup>レ</sup>者<sup>ハ</sup>可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>

用<sup>フ</sup>兵<sup>ヲ</sup>矣。何<sup>トナレバ</sup>則<sup>チ</sup>

夫<sup>レ</sup>用<sup>フル</sup>兵<sup>ヲ</sup>之<sup>レ</sup>法<sup>ハ</sup>

有<sup>リ</sup>所<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>常<sup>ニ</sup>。  
有<sup>リ</sup>所<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>变<sup>ニ</sup>。  
对比 + 同義反復

三

什<sup>ナレバ</sup>則<sup>チ</sup>困<sup>ミ</sup>之<sup>ヲ</sup>、伍<sup>ナレバ</sup>

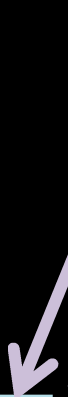
則<sup>チ</sup>攻<sup>メ</sup>之<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>敵<sup>セ</sup>則<sup>チ</sup>

逃<sup>ル</sup>之<sup>ハ</sup>、兵<sup>ヲ</sup>之<sup>ヲ</sup>所<sup>ニ</sup>謂<sup>フ</sup>

常<sup>ニ</sup>也。以<sup>テ</sup>寡<sup>ヲ</sup>覆<sup>ス</sup>衆<sup>ヲ</sup>

兵<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>謂<sup>フ</sup>變<sup>ニ</sup>也。

對比 + 同義反復



四

古之善用兵者、

雖能以寡覆衆、

而什困伍攻之道、

未嘗忽焉。

所謂行小變而

不失其大常也。

對比+同義反復

### 3 各段落の役割を 確認しましょう。

#### 一 段落―

- ① 具体例を挙げる
- ② 主張を述べる
- ③ 「変」と「常」の対比

#### 二 段落―対比の繰り返し

#### 三 段落―

- ① 対比の繰り返し
- ② 「変」と「常」の定義

#### 四 段落―対比の繰り返し

**\*「常」の重要性の主張**

4 自分の主張を伝える  
ためにはどのような  
ことが大切でしょうか。

「これを伝えたい！」という  
明確な内容が必要なこと  
は言うまでもない。  
それだけではなく、

「どのよう<sup>①</sup>に伝えるか？」と  
考えること<sup>②</sup>、そして、  
**伝え方や語り方といった技**  
**法**を身に付けることが重  
要なのである。